

協働事業に関する企画書

団体名 NPO法人さやま保育サポートの会

1 事業名	子育て支援方策の拡大・深化—家庭訪問型支援(ホームスタート)の展開—
2 事業の詳細	昨年度は、ホームスタートさやまを立ち上げ、支援体制を整え、3名のオーガナイザーと13名のホームビジターを育成し、プレスキームとして5件の利用申し込みを得て、試行訪問を実施することができた。今年度は、ホームスタートジャパンから本スキームの認定を取得し、より多くの訪問活動を展開していきたい。事業の意義を広めるため、こども課や保健センター等と連携しつつ広報活動に努め、ホームビジター増員のため、養成講座も実施する。当NPO法人が家庭訪問型支援の枠組みを構築し、支援の先鞭をつけることによって、本格的に狭山市の事業として家庭訪問型支援が実施さ
3 実施体制	スキームの管理・運営 …オーガナイザー 3名 利用家庭への訪問活動 …ホームビジター 13名 オーガナイザー、スキームへの助言・支援 …運営委員 10名
4 役割分担	【提案団体の役割】 ホームスタートジャパンから本スキームとしての認定を受け、訪問活動を本格的に実施する。ホームビジターの養成とスキルアップを図り、活動の質を高めたい。これら活動と並行して子育て支援に当たるこども課、保育課等との連携を強め、家庭訪問型支援を定着させたい。 【市の役割】 ①家庭訪問型支援を必要とする子育て家庭を把握し、当事業に繋げる。 ②こども課の家庭相談室や保健センターの家庭訪問支援との差別化を図り、市の事業の隙間を補完する事業として実施運営経費の補助を行う。
5 協働の効果	①家庭訪問支援を必要とする人を知覚するのは、総合子育て支援センターや子育てプレイス、保健センター、こども課等である。当事業の中の運営委員にもそれら施設から入ってもらっており、それらの協働の成果として、スムーズに5事例の試行訪問を実施することが出来た。 ②長年のNPO法人の活動を通して、心を病む親の増加に直面し、ホームスタートジャパンが推進する家庭訪問型支援の必要性を自覚した。それから1年間の間に本スキーム立ち上げまで進むことが出来たのは、こども課等のバックアップによって、協働推進の補助金を得られたこと、広報活動、会場確保等各課からの全面的支援を受けられたことが大きい。
6 事業のアピールポイント	試行訪問を実施して感じたことは、遠隔地から狭山に移住した親たちの子育ての「孤育て」化の実態である。子育て中の母親が誰にも相談できず一人で問題を抱え、自分を見失ってしまう事態が生じている。また心を病んだ親をサポートする必要度はきわめて高い。孤立感やストレスが増幅し、虐待に走る前に、支援や手助けを受けられるようにするためには、支援者の層を厚くし、裾野を広げる必要がある。 住民参加型の支援システムであるホームスタートは、試行訪問を通して効果あるものと確かめることが出来た。狭山市の掲げる「子育ての街・狭山」を実現する手立てとしても、家庭訪問型支援を定着させたい。